

七 不斷の警策に驚かざるか

生じか半途氣な智慧は大法の前に打ち捨て、むづと本願を信ずるがよい。それが出來ねば、飽迄疑ひ究めるもよい。蓮如上人は、いつも「ものを云へ」と仰しやる。物云はずに黙つてゐるものは恐しい。御法義のことについては何も隠さずに打ち明けて相談せよと云はれてある。胸を開いて心を廣くしてこれを信受せよや。

彼の臨濟禪師は申された「大衆、夫れ法のためにする者は、喪身失命を避けず、我れ二十年黃蘗先師の處に在りて、三度佛法的々の大意を問うて、三度他の杖を賜ふことを蒙る、如今蒿枝の拂着するがごとくに相似たり、更に一頓の棒を喫せんことを思ふ、誰人か我が爲めに行じ得ん」と。所謂、信念信仰、徹底の感味は、學問や知識の講釋では決して得らるゝものでない。須らく實參實修を要す。臨濟禪師の如き、その好適例であります。

才學共に衆に秀でたる臨濟禪師、初め黃蘗禪師に參すること三年。鞠躬如として清規を嚴守し、研參これ努めたが、一向どうも目鼻がつかぬ。處へ直日の睦州と云ふ和尚が來て「最早何年居られる」と問ふ「三年だ」と云へば「師匠の處へ直接問答したことがあるか」「いや未だ伺つたことはありませんぬ、一體何と申して參つたら好いのでせう」。「それは、如何なるか是れ佛法的々の大意？ 佛法ギリくゝの處はそもく何でありますかつて、尋ねたらよい」。乃で臨濟は、御師匠黃蘗禪師の許へ參り、「如何なるか是れ佛法的々の大意？」と出拔けにやつた。禪師、有とも無とも云はず、座右の檜の棒をおつ取ツて、驀向からウンと云ふ程撲りつけること二十棒。痛さこらへてスゴく歸つて來れば、睦州和尚待ちかねて「話の次第は如何だい」と聞く。「まだ云ひも終へぬに撲り飛ばされて、何の事だか薩張り譚が解りませぬ」。

「それならもう一遍行つて来い」と云ふ。臨濟正直にまた行つてお尋ねすると禪師また何とも云はずに撲付けた。歸つて来ると、睦州がもう一度行つて来いと云ふ。また行く。また撲られる。斯様にして三度、佛法的々の大意を問うて三度撲られ、三頓の棒を喫して六十棒を與へられた。

臨濟、年僅に十六歳、道を求めてただ切、されど未だ六十棒の味を會することが出来なかつた。睦州に對つて云ふは「幸に慈悲を蒙りて某甲をして和尚に問訊せしむ。三度問を發して三度打せらる、自ら恨む、障縁ありて深旨を領せず、今且く辭し去らん」色々と御親切にお引立下さいましたけれども、どうもまだ因縁の熟しないためか、一向所詮がございませぬほどに、暫くお暇を頂いて出て行きたうございませぬ。」それならそれと、御師匠に御暇乞するがよからう」とあつて、睦州が禪師に一寸耳を吹いて置いた。往けば禪師は萬事承知して、高安灘頭大愚の許に行けとの事に、臨濟去つて大愚の許へ行かれた。すると大愚和尚「什麼の處よりか来る」臨濟「黃蘗の處より来る」。「黃蘗何の言句かありし」。「某甲三度、佛法的々の大意を問うて三度打せらる、知らず某甲過ありや過なしや」三度お尋ねして三度ながら撲られた一體私の何處が悪いのでせう。とやツた處、和尚「黃蘗與麼に老婆あり、汝が爲に徼困なることを得たり、更に這裡に來つて有過か無過かを問ふ」黃蘗禪師これほど親切を盡してお示しになつて居るのに、貴様はその親切が解らぬのか……。叱り飛ばされた言下に豁然大悟。「元來黃蘗の佛法多子なし」と臨濟禪師は叫ばれたさうであります。斯うして臨濟は遂に黃蘗の衣鉢を傳へたのである。

自分の迂濶を叱られた。叱られた端的に之を悟つて大悟徹底した。私共は不斷の警策に驚かねばならぬ。如來の大音宣布は分れて各方面に顯れ、偉

大だいの警策けいさくは私共わたくしどもの上うへに加くはへられてある。須すべからく善知識ぜんちしきの言葉ことばの下したに、歸命きみやうの一念發得ねんぼつとくし、辱かたじけなさに涙なみだこぼるゝの境きやうに達たつすべきであります。